

令和7年度 東京都立両国高等学校全日課程・中学校 学校経営報告

校長 鳥屋尾 史郎

1 今年度の取組と自己評価

- 【評価方法】 ① 学校運営連絡協議会による評価（生徒・保護者・教職員）
② 全教員に対する生徒による授業評価

(1) 教育活動への取組と自己評価

取 組	自 己 評 価
<p>1 学習指導</p> <p>① 教科主任会を活用し6年間の効果的な指導計画を立案するとともに、教職員の共通理解を深めさらなる授業力向上を図る。</p> <p>② 学校での学力推移調査等、高校での外部模試等の意義を生徒に理解させ、学年・教科は分析結果を学年集会等の指導を通して生徒に還元するとともに、6年間の経年変化を把握し、丁寧できめ細かい指導を継続する。</p> <p>③ 学校評価アンケート調査の結果の分析や、管理職による授業観察を参考にして、授業力向上に係る課題を整理・改善する。各学年+1時間以上の自宅学習を目標に掲げ、基礎・基本を修得させ、定期考査等により、基礎学力定着状況を定期的にチェックするとともに、発展的な内容の学習にも取り組み応用力を育成する。また、高校3年生では生徒の進路希望の実現のための組織的・計画的な補習・講習体制を計画・実施する。</p>	<p>1 学習指導</p> <p>① 教科主任会を教育課程検討委員会に改編し、中高一貫教育校として中高の接続を考慮し、これまでの課題を解決する教育課程を編成する作業に着手した。基礎力の充実や発展的な指導を含め6年間を見通した教育課程案の検討を進めた。</p> <p>② 学力推移調査、外部模試の結果から学力の伸長を定点観測し、分析会によるアセスメントを経て、授業実施に活用した。</p> <p>③ 学校評価アンケート結果や校長による授業観察シートを活用した授業改善を進めた。面談による個別指導、学年集会によって学習時間を確保する指導を行い、一定の成果を上げた。授業では生徒が主体的に学び合うことのできるペアワーク、グループ活動及び発表活動等の授業を実践した。放課後、土曜日、長期休業日における補習・講習を実施し、学力の向上に向けた取組を実施することができた。</p>
<p>2 進路指導</p> <p>① 生徒が活用しやすい「進路の手引き」「進路指導資料」及び「キャリア・パスポート」を作成し活用する。</p> <p>② 生徒・保護者との面談をきめ細かく実施するとともに、後援会や淡交会と連携した進路懇談会、体験講話などを一層充実し、生徒のキャリア教育を推進する。</p> <p>② 進路部主導で学年との連携を強化し、教員・生徒・保護者に「進路だより」の定期的発行を通して適切な進学情報の提供、本校卒業生による「進学講演会」を実施し、進路意識の高揚につなげていく。また、生徒が利用しやすいよう進路指導室に常駐の教員を配置し、生徒の進学にかかる面接指導等を丁寧に行う。</p>	<p>2 進路指導</p> <p>① 「進路の手引き」「進路指導資料」「キャリア・パスポート」は、各クラスでの面談等で活用し、大学進学に向けて生徒が主体的な進路選択を行うことができるように進めることができた。</p> <p>② 各学年とも適時に面談を行い、生徒からの進路相談を適切に行うことができた。また、後援会と連携した進路懇談会は卒業生の体験を聞くなどにより、大きな成果を上げることができた。</p> <p>③ 「進路だより」の発行や「進学講演会」を実施し生徒たちの進路意識の向上につながった。外部模試による本校の現状把握と経年比較、他校との比較・分析、校内分析会等により、生徒個人データの共有化・課題等による組織的な進路指導に取り組んだ。</p>
<p>3 生活指導</p> <p>① 中学校と高校が連携し、挨拶指導、制服着用指導、頭髮指導、遅刻指導などを組織的に実施する。</p> <p>② 交通ルールへの遵守、登下校時のマナー向上の指導を徹底するなど、交通安全教育を強化する。</p> <p>③ 学年・クラス・部活動・生徒会単位でのボランティア活動など、奉仕体験活動の推進に取り組む。</p> <p>④ スクールカウンセラーや特別支援教育センター校の中野特別支援学校等の外部機関などと連携した相談体制を強化する。</p>	<p>3 生活指導</p> <p>① 基本的な生活態度についての指導を中学校を中心に実施することができた。高校における身だしなみや遅刻指導は課題であることから、継続的に取り組んでいく。</p> <p>② 交通マナー全般は良好だが、自転車通学におけるヘルメット着用指導は引き続き指導を強化する必要がある。</p> <p>③ 地域からの要請に基づき、ボランティア活動が活性化してきた。</p> <p>④ スクールカウンセラーやCSVと連携した相談体制により、外部機関との連携がさらに強化された。</p>
<p>4 特別活動・部活動</p> <p>① 体育祭を室内で企画するなどの新たな取組を活用する生徒会活動・委員会活動などを一層充実発展させる。</p> <p>② 部活動を充実させ、加入率の向上を図るとともに、学習との両立を図らせる。</p> <p>③ 中学校3年生におけるスタディツアーin ユタ（海外研修）の充実とともに、6年間を見通した高校までのスタディツアー（海外研修）を検討する。また、英語によるディベート大会やスピーチコンテスト等に挑戦させることで英語学習の成果や評価を確認する。</p>	<p>4 特別活動・部活動</p> <p>① 室内実施の体育祭は、種目や競技方法の工夫によって適切に実施することができた。またの他の学校行事においても実施内容や方法を工夫することにより、高いレベルで実施することができ、実行委員会の活動を中心に帰属意識、連帯感などの育成を行った。</p> <p>② 部活動は、兼部も含めると100%以上の加入率となった。</p> <p>③ 中学校では、アメリカ・ユタ州における研修旅行を計画どおり安全に実施することができた。一方、高校のカンボジア研修はタイとの紛争激化によって中止にせざるを得ず、来年度以降に新たな海外研修先を探す方向で進めている。</p>

(2) 重点目標への取組と自己評価

取組	自己評価
<p>1 学力の伸長</p> <p>① 高校では、学習状況等を個人データファイルにまとめ、個々の生徒指導に活かすとともに、放課後の講習・夏期講習等を強化する。</p> <p>② 中学校では、定期考査や学力推移調査等における学力状況の把握・分析・検証を行い、授業改善や指導体制整備に活用する。</p> <p>③ コンクール・コンテスト等に積極的に参加させ外部評価を活用することで、生徒の学力を伸長させるとともに、指導力の向上に生かす。</p>	<p>1 学力の伸長</p> <p>① 高校において、面談等による生徒の学習状況の把握を行った。また、放課後や土曜日、長期休業中の補習補講を積極的に実施した。</p> <p>② 中学校では学力推移調査を適切に活用し、生徒個人の学力推移を分析、検証した。学力の遅れを放置せず、個別指導等を行った。</p> <p>③ コンクール、コンテストに生徒を参加させ、いくつかの分野で成果を上げることができた。</p>
<p>2 国公立大、難関国立大へのチャレンジを支援</p> <p>① 国公立大学、さらに、難関国立大学へのチャレンジを支援する。</p> <p>② 放課後講習、土曜日・長期休業日の講習等を強化し学力向上を図るとともに、きめ細かい進学相談を実施することで予備校等に頼らない、生徒の難関国立大学・国公立大学へのチャレンジを支援。</p>	<p>2 国公立大、難関国立大へのチャレンジを支援</p> <p>① 生徒の早い段階での進路希望の設定と、学年集会や進路部講話などで志望校の確認と指導を行った。</p> <p>② 夏季休業日における講習予定を早い時期に提示することで、予備校・塾に頼らない自校の講習での完結を目指した。また、複数開講することで希望する講習を受講できるようにした。</p>
<p>3 広報・募集活動の充実</p> <p>① 総務部を中心に、これまでの授業公開、学校見学会・説明会に加え、体験授業や学習塾対象説明会等の新しい広報活動を企画・実施することで、小学生・保護者に対する広報・募集活動の充実を図る。</p>	<p>3 広報・募集活動の充実</p> <p>① 都立等中高一貫教育校合同説明会を活用して、他校との違いを分かりやすく小学生、保護者に提示した。学校説明において生徒による説明を重視し、小学生に身近な説明会としたが、出願者はさらに低下して584名にまで落ち込んだ。</p>
<p>4 礼節指導の徹底</p> <p>① 朝の挨拶指導はもとより、相互の挨拶、来校者に対する挨拶指導を徹底する。セーフティ教室や登下校のルールやマナー遵守の組織的な指導を徹底する。そして両国生として品格のある立ち居振る舞い・挨拶・言葉遣い等を、全教職員できめ細かく指導する。</p>	<p>4 礼節指導の徹底</p> <p>① 朝の挨拶指導などを継続的に実施した。避難訓練や学年集会等の様々な場面を活用し、安全教育を実施した。また、薬物乱用防止など講演会も実施できた。</p>
<p>5 数値目標の達成状況</p> <p>① 長期休業日等の講習、延べ200回、受講者5000人以上を目指す。</p> <p>② 部活動加入率90%以上</p> <p>③ 英語検定、中学校3年生までに準2級85%、2級40%の合格</p> <p>④ 国公立大学の現役合格者数70名以上、難関国立大学・医学部の現役合格者数20名以上を目指す。</p>	<p>5 数値目標の達成状況</p> <p>① 長期休業日等の講習、延べ118回、受講者6443人となった。</p> <p>② 部活動加入率延べ95%となった。</p> <p>③ 中3の英語検定準2級以上83%、2級以上41%が合格した。</p> <p>④ 国公立大学現役合格者36名のうち、難関国立大学7名、医学部2名が合格となった。現役進路決定率90%であった。</p>

2 次年度以降の課題と対応策

課題	対応策
<p>高校からの入学がなくなって4年が経過し、完全中高一貫教育が進行する中で、教育課程の見直しが十分に行われていないことから、完全中高一貫教育の新しい教育課程を編成していく必要がある。</p>	<p>教育課程検討委員会を中心に新しい教育課程を検討し、令和9年度からの実施を目指して編成作業を進める。合わせて各教科の教育内容の見直しを実施し、生徒の実態に即した教育内容に改編する。</p>
<p>中学校から高等学校へ探究活動の流れが十分に機能しておらず、教科の枠を超えた中高一貫の探究活動を系統的、計画的に進めていくことができるように、編成していく必要がある。</p>	<p>中高一貫のメリットを生かした系統的な探究活動を実施し、生徒の発達段階に応じて、身近な地域学習からより高度な課題研究に至る探究活動を構築する。また、探究活動とキャリア教育とを連動し並走する本校独自の探究活動を確立する。</p>
<p>カンボジアでの海外研修が紛争により実施できなくなったことから、高校段階での海外研修の全面的な見直しが必要となっている。</p>	<p>カンボジアに代わる新たな海外研修先を定め、6年間の中高一貫教育の中での国際理解教育として位置づけを明確にしていく。</p>
<p>スクールカウンセラー4人体制が進む中で、特別な支援を要する生徒に対する組織的な支援体制の取組を一層推進していく必要がある。</p>	<p>支援を要する生徒の支援体制を共有する会議の位置づけや、不登校生徒の校内別室指導推進事業の運用に着手し、より丁寧な支援体制を構築する。</p>
<p>挨拶、身だしなみ、時間を守るといった基本的なルール・マナーを身に付けさせること、他の人とのコミュニケーションの在り方や社会の一員としてのソーシャルスキルを身に付けさせること、合理的な学校生活の在り方を考えることなど、生活指導の在り方を多方面から考えていく必要がある。</p>	<p>指導部を生活指導部に名称を変更し、中高それぞれの生活指導主任を置き、より細やかに生活指導部と学年と連携した指導体制を確立していく。また、基本的なルール・マナーの定着の指導と合理的で納得性の高い生活指導の在り方が同時に可能となる中高系統的な指導方法を検討していく。</p>